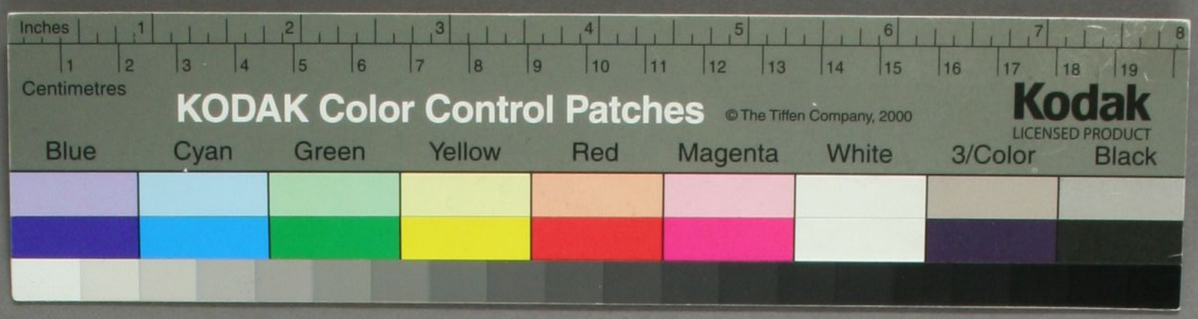
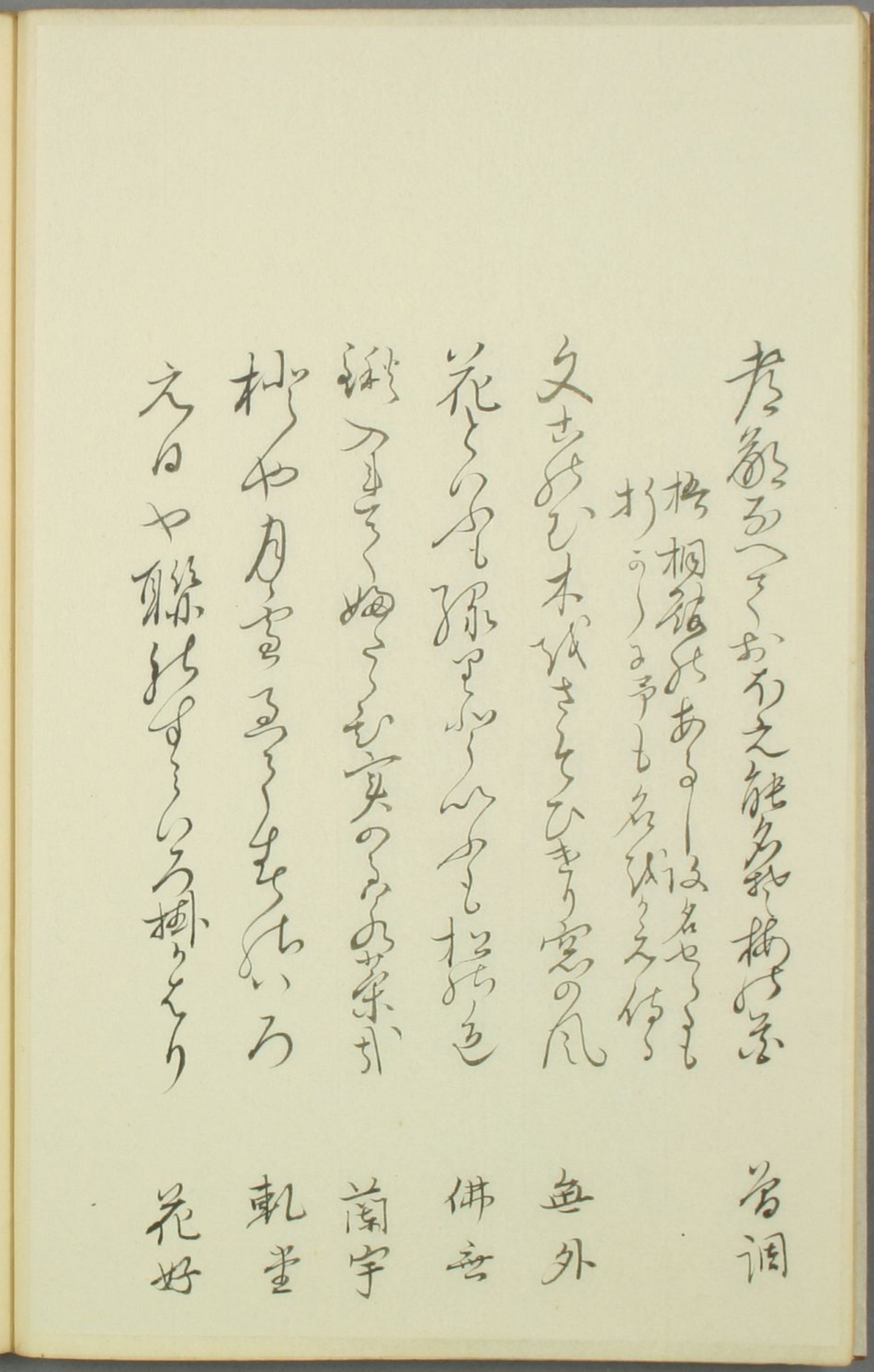

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

中村保定文庫
文庫 18
508

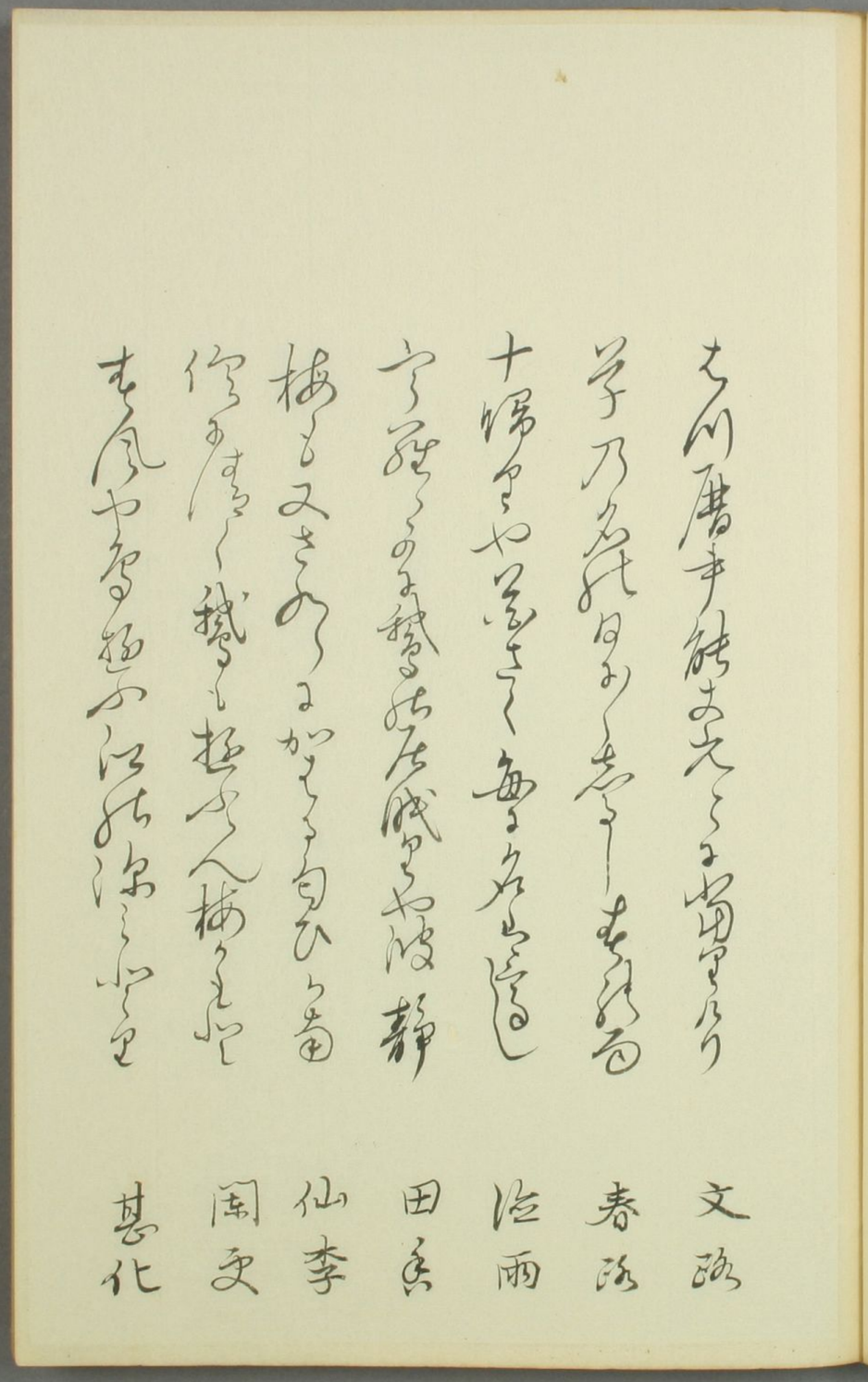
呆叡笙著

閑鷺撰

芭蕉翁俳句



旨調
無外
佛壺
蘭宇
軌董
花好



文政
春政
治雨
田兵
仙李
閑吏
基化

花の名をうえ多種植む　吐月
名のへぬ処もむめ咲ひろめ　文来
鴨すや乃宮も祈りや百ちより　玉尓
千代経ませ名を祈る宮や松のも　負梅
宮寺其名絶せよ口ずき　東里

○

等名乗もの笑ひのも　紀言

○

政子等菜をも且うる　存義
梶葉も名も方よりも人もの香　桜川
花もき栄曙松も南　百萬
咲之て等おろ乃菜　雛口
歩須やあ手も乳名人事る　多少
呼うえて去ま吹のてて　可因

抽於名もあ〳〵半あてまきせし
打〳〵妙見ハ
人乃名もかゆ〳〵なよしもつゝ月　田女
文ゝる名ハいのちもうしをり現　宗梅
礼帳ゑすゑも於名や梅ゝ宿　葵豆
鍬投うち啼ほ名ゟ燦井ゟ　留倫

もしゟ筆寺ゟ仔ゟ浮ゟ
詰の筆ゟ六君〳〵よ里そ〳〵る　由比濱波

題夢鷲

夢入烟霞佳景多曾随羽客　大塚信成
愛紅鬱知君緑得玉家趣應　芦川克明
是山陰道士過　朝之翰

墨池揮筆彩雲開君自風流
王家寸忽見籠鵝春夢裏
還教道士更携来

書窓春滿月花過入看山陰
道士携琴枕上暫時贈君沒案

滕盛明

起之祥

頭千載彩雲多

洞房春夢換琴文吳山風流
已屬君氣象從来誰不識彩
毫工染墨池雲

原重規

陽春白雪白鷺群集影翻飛

木安啓

夢裏分唯是楚王眠覚後
何如起見亜山雲

記閑戯之夢

黄冠道士下山阿携去教人
養白鶴、白草青青春日暖
澄江萬里畳微波

楓園主人

閑戯軒説 頤記

箱魯生者抱中一豪傑也游戯
輪墨與余相接二十餘年一日
謂余曰今茲乙未元日之夜夢
観白鶴活潑争水飲徐ろ尋亡悵
然覺矣占之吉也家人挙喜遂
以為名居可耶余曰可也昔王

君軍愛白戟而得筆法也生窺其墻久而夢白戟則後可入其室必矣余閒之有大變而後知為大夢生今古夢之夢則可謂覺之覺者也已於是乎書

華岡勝益道

芭蕉
曾良
嵳山
此筋
良
蕉

萩原や霧よ渡すな
ふた抱きの
年月を小袖の
海苔炙製をさき
立ち
日ぐれ
盃

もつもつ苦労苦労
半ばもつもつ五六年
法外地より帰り
清水乃道に着
たび参ふきふあり
いつも仲居少女
教文乃為に
書

閑
警
訪
足
茶
閑
書

身ふ
初めの一度ふ
宇ふんに
事生ふ
京の半ふ
七宗さふ
私方ふ

訪
足
茶
曰
足
訪
警

掃除日も下旬を奥へぬつて
ニ三日を残すのみとなり
多忙の為め
埃を浴びるも知る
ひまもなく働き通し
すまさんと焦慮
此通知を受けるまでは
帝の実物

等　曰　足　語　驚　足　曰

埃へまみれて
育子乃夜も
寝ずに
工夫をこらし
苦心の
あとは

等　話　驚　曰　驚　話

花さく里三十日もあそぶ　　足
もる里の秋は淋しき　　等

秋月家にて
海面さしてまつ俤を立く

桜うつす岩井の水を掬ぶ
ちるを惜むや人も自然と
かすむ波

阿誰

こゝろおもき歌枕を尋ぬ
橋よりすこし西四方の月
露にあそばれて来ぬ宵
山もる庵は秋到つ
火よかすかにてゝ
さゝの小出の笹を
名所尽の笹

伯石
芭好
東鶯
蘭亭

沖秋花の夢の名残り坤　文函
かくやのくすしとぞ伝へし　西
よよの春のうき封　好
きぎんおもう秋の出魚る　雪
おぼつかなき雲井の烟北を遠く　宇
月もお旧ろよ広津の池　詠
吳牛新彩のみ　西

くら

新ふるき今めかしきも共上　好
雪純てうし詠よ管弦　雪
和干猿こそ　宇
事絵の裏よかしまむる　詠
はつまおもひよ疲も彩也　丙
往来の忘草かな滅も掬而申　好
おもかくく絵乃庵るもも城業　雪

宇 いかにも大和やまと言の葉さ
路 糊まぜて木葉もて綵
司 月代な翁幼も多さいたく
好 うつゝなみ（房指）磐迹く
雪 傘張先へ後ゝしく
宇 すゝ兄ぬ男もちくる物
語 影厚く昔やふとよき牡

宇 仰ぐ笑よあてまよつゝん
路 面張板をすゝ度の面
司 いつも笑ひをおい手齊
好 机まよふひも七曲
雪 枝をのえくゝおよ物
宇 路

表六十字

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
十五秋乃彩[illegible]
風地域[illegible]

花好
百萬
開幾
好
萬
聲

机右

春

[illegible]
秋一夏日[illegible]
前一[illegible]
共中城[illegible]
数多[illegible]

社境
毎朱
花好
又燕

此岡を打こゆる文(む)挂の形　仏生

文(む)引そむる雲やけさの一条山　宋雪

まき柳や水底かけて八重葎　何花

八うらはふ紅てやまき月　文来

文やまますやいづくも出し蛙哉　存義

まくら机より見さぬ嵐の巣　百万

一鼎うき世捨笠を称ん哉　宋鵞

つまやうや仲の砥乃薮和　木阿

手半よやをなそ湿聚像　可円

花折をいとま乞来れ　百万

荷まやや川ふ重衣猿の上　宋雪

松明や梅見の路の案　存義

あしてまそ其をこの柳雨　蘭夕

蒜さゝや根ごめ髪も肩過ぬ　文路

行く河よ雫も落ぬ猫の恋　葵巴

恋や田舎好みの体も痩の秋乃先　秀玉

水論をこゝろにくゝ蛙の那　閑雪

侍ふて我れ寒き雪よ入

法神は人よ浮ん蓮花

接種こゝろも残る戦ふ糸　百芳

　　画偏

第5番乳母もお百へつ百人そ　閑雪

　採花聴鳥渡流水

あ府は釈氏仏そ桜ふ

ま糸山ま國を流きり　芸村

ふ魚お雲ふ冬ん水の上　孝治

中に柳よ芽ぐくも哉

暁ま夏　梢ふ猫の恋　理祇

　　宜来

花好　　文酒　　琴書　　寧固　　阿誰　　佛前　　伽語

友季　　五出　　梅几　　多少　　茗村　　雁宕

夏

茶摘と汗拭もしや同郷人
世外の乞我ん心深く秘む
老来初めて衣を更む
夏もうよそ行の多
浅きにも初めや衣仏
股引も一里かなぬしあり

以酔
酔人
正長
也有
存義
阿誰

卜屋獨坐

[illegible]
すゞしの隣まで
[illegible]
[illegible]
[illegible]
風鈴も協奏曲
先輩[illegible]

乃宗
栗斎
芭好
重載
文治
哭鴎

浴そふ松茸や細庭八百屋　　蒲山

高敏

只そこ〳〵山ふところに川なんど談笑　　探雅

根ごぼう経まで洗ふ冷水田いまもほしつゝ

石ふみも楠もあをきのおよきかな　　雷雪

茶うす奥は磨ぎ立ての音　　平加

石工や鑿うしろに清水哉　　苗村

宇治橋の苔よ掃うな散紅葉　　雷雪

うまうまは厩を覗く牧の秋　　泊雨

ふるまふは酔ふ為也破れ傘　　一紅

短夜や二つの星の嵐吹　　二丹

松ヶ岡や

面〳〵に数珠さゝやかな妓まの声　　雷雪

筆や紅の色をかきおろて　　佛童

大市おこなはるゝ事
花のころ乃すゝしろんや幟舟
遊ぶ人多し沖まで漕ぐ漁火
上るなり罪おそろし大勢様式
弘法の封じも同じまつりにて
東海寺
浴庵の石のつゝ組む四角な
森羅

乃宮
七好
雪江
寿少
平秀

五庵之杉ぬき玉砂雪吉
清盛乃こゝに話せ昔の月たんす
二條社は拝ろう前の雨
秋のくれめ乃雨社星ぶ
松よろかゝ相見やう屋漆
杉如鏡の池を捜や八重梅
仏みち光て半ば紀野いぶす

柳几
百合
花好
田女
葵豆
百合
蘭宇

五月雨や一すじ流る幟の跡　閑鶯

孤山よ一幸と雲の窓の梅

江一面峰光雪を重ね雪を重ねそう

孤山よ一点あかつきの人底　存義

七瘁ちやう海よ扁舟　佛安

凍一すじや屋根も招梅花　同我

青年紀行あり

学えちご小千谷の問や涼しき　東里

日さす軒端の蜘の糸乱れ　象好

焼き畑に蕎麦上り清水哉　武然

異体のこれも一家や雀鮫　文波

涼風やほり　百美

りて伊勢をこゆるも休て
まゝひとつ坂をかくるなり　宗鑑

南良

蛸壺や昆雲を含む仏の耳も垢　〃
涼さや夏ともすれば晒川　〃
梅雪妃の外もき雨うまや簟　吐月
九輪かゝ下は蝉羹なるべし　玄友

秋

七夕や妓まうでの振　由来
梶の葉をふえ?踊る帰　祇空
錦引や宝珠抱ける花盛　素人
秋の夢旅寝の枕牧や浦の苫　宗鑑
持ち来る土も色なる菊なれや　友益
きぬ山はまゝ〳〵もよし菊なれや　一雨

通て橋上

小ぐらまで（きたな）もよき家や酒屋など

あさ日やかすみ渡りて

綿木を立てる魚うる女かな　文路

呼よせて駕も売るなり雪の朝　里梅

扶よもぎ摘て誘ふ茶摘哉　帯義

夏消て跡なき雪や筑波山　五出

晋我

設石

なでよつて（何）よねとすやおもいもよらず

指さしてうまや問ふ月

待点　梅川

犬啼はもし方や関の月　文路

うぶの子よ最上も働く桑山哉　春葉

歓旧宅は酒よまんぢう後の月

もみぢや芝ゝぬめ郎も　百美
かゝる戸を内は冬ごもりかな　何達
稲つまや山ゝ裏の川この向川　几董
調市まいお撰取ゝせよ放生会　閑耕
埋木ゝ多咲は春昼ありけり　乾童
時雨立て蛙をきゝもやはゞ新　弘武
名月の雲やゆかぬまゝ後　文治

鞍よせて姫庄山里の暖ゝ哉　翁口
うゝゝやまいの雪のあゝ孤かな　蕪村
彩雲のまかゝる峰の春の風　花好
ゆふ立やちこのゝ柚徳爰も神書ぶ　雨考
扇のゝ為細君の刀まゝもと　乃宝
稲つまや一あれ見たる人　秀玉
白雨に笠の拵今お撰ん　百美

対ふまつ秋田女
四月桜物よ尺寸ほ木の実　志賀
もも陰もふるや木もよ山　黒雪
名月もあるや秋戸を風も　文未
世話もも秋戸を策なる　雪風
芦もも種のひ八もの、十三秋　金汨
折まねもも尓ぬ雪尓　梅川

業陸北門井原
萩もや免乃耳の雪七ぃし　存義
六川立はまも野も雪武　黒雪
即看雪牛星
紋ま折業一夏七ま川　笛倫
志ま友話ふてらま語侍
十六秋ふまま老ま八　黒路

題五味

味へつゝ知るもうき松柏の
神農も称しや当麻
影露の今しもや菓子
折からの時雨や執し柄
月も吸ふき砂糖も油も釜や
越後もろもろ少老八

存義
閑雪
文路
葵呂
百万

折風和田みはやる 綿ぶち
硬き峰とし 峰のきもす

百万

九月の末つ菓子
招ぬれし日を菓子の節句哉
青山や帰ふも寒き菓
長松大屋敷
雪よ入る角於ろや切通し

花好
仏哲

尚佛

名こそや若の玄ゝ松波山　花好
色水城已ゝあしも花の原　、
まち松梅田よ山風落てゐるまゝ　黄豆
さゝ蛙笹やゝ引裂りもゝを　梅鹿
寝ゝ窓の採姫鶯ゝ月見ゝな　貞梅
まゝ松ゝ波ゝりゝ数ゝ笹　久流

冬

杜鵑ゝ名ゝ松ゝや井筒　紀言
羽二重ゝ通ゝ山もあ雪ゝ冬木立　柳几
姥の鬼もまゝ野十松のゝ　半良
附合同にはゝ干潟やも蜑　雷鼓
酢の名はゝ干潟やも蜑　可同
　　悦山

平川

帆のけ初日よ霞すそもか　水樹
岡辺ゆく牛飼ひ中娘　や山おろし　平砂
日を浴びて火達ふ山の数々に　百美
ゆるにふるふ土を乾す多み　玉井
多の巣八風よおろへ夜業か　文治
神と神本篇ふ手ふ神楽　琴露

文弥乃屋風を芝やや新　花好
多仙や拾ふ茶もの　風宿
その中や下乃白ふ降ゆ次　百秋
基を開むやるもゆ神ら雷　存美
沸ふ水ふもの手ふ鳴る琴ゆ　柳雪
瓢の神種ま　玉雪
比歳坂よ一ま　重の乃

楼門はれ　五出
もやはれさま　葵豆
　彩のかけ菓も一と筋も緑
錦堆乃汁も彩も本も菓も　益村
宝垢離はかんこう半月の宵　祇洹
あさみ雪　帆柱を冬木月　菅雪
楊の春寒　よ横る浜菓哉　来卜

薄菓子に春寒浴菓の入江哉　新朱
おかしやうこは休む一里塚　黒鶫
一杯ろ風のまこも松　海景
清出る雪解や小筵　菓誠
縁端の鳥雲に蔵や松　梦由
冬や相芽夏かれよもぎ　久咲
炭のまや伐されし跡　吉岩

小雪やすめ住む世もあの中　百的
逢ナラや熱柳もちる落ちる　宗鑑
此頃や妹見さる間も朦も冤　留偏
取ら免もすくむ川辺の夕ぐれ　花好
梢梯子やこの老松ホもれ　木冤
寺まけて材木ほす仕丈妹家　仏生
漁師やうつる高野嵐哉　文海

冬神楽乃や引出す狩衣よ　貞梅
山寺や鐘撞直して帰里ぬ　宗鑒
干網をすすむ九の字なり　花好
初雪や出梅ぬ橋ぬ渡里ぬ　糸桐

南方松赤き冬こして来き
冬篭王寿里無愛
寿里ぬ自此ぬ出一石の錦ぬ来

乃宗

おわて之 君士等を

彫工　吉田魚川

昭和十三年八月廿二日　写　板字了　板多字

写本　板字之本